

## 亜欧堂田善の西洋版画受容

坂本篤史（福島県立美術館）

現在の福島県須賀川に生まれた亜欧堂田善（1748－1822）は司馬江漢と並んで江戸時代後期を代表する洋風画家である。彼は西洋から伝来した腐食銅版画の技法をいち早く習得し、舶載版画や洋書の挿絵を摸刻しながら、それらを自作に取り入れていった。本発表の目的は、田善の着想源となった可能性のある西洋版画をあらたに提示することであり、また田善の原図受容の手法や特色について主に造形的側面から考察することである。

摸刻銅版画の原図を探る研究は主に岡村千曳、陰里鉄郎、磯崎康彦、菅野陽、勝盛典子の諸氏が行っており、特に菅野、勝盛両氏は日本国内に現存する洋書に付された挿絵や書物の来歴調査などを通して、田善が直接手にした現物を特定するという、きわめて実証的な研究を残している。しかし、田善の時代には現存したが、その後消失してしまった洋書、版画の数は計り知れず、田善の西洋版画受容の全容解明には至っていない。

こうした問題に対して、本発表では主に西洋の視点からアプローチし、より広範に洋書、版画を検証することで、田善の着想源となった可能性のある西洋版画をあらたに提示する。発表者はかつてこうした視点に立ち、田善の《ネーデルラントの独立》、《ピョートル大帝》、《農耕女神像》、《二州橋夏夜図》の図様の源泉として《ニスタット条約締結記念祭第二図》を提示した。本発表ではまず、この西洋版画が《浅間山図屏風稿本》に描かれた二人の人物の着想源にもなったことを指摘する。同様に南北ブラバントの地誌について述べた、ジャック・ル・ロワの複数の著作に付された版画挿絵は《西洋港風景図（西洋河港風景図）原版》、《西洋街頭風景図（西洋古城図）》の、またニコラ・プッサン原画、リチャード・ブルークショウ版刻のメゾチント版画《サテュロスたちに襲われる眠りのヴィーナス》は《素描（天使と女神）》の、版元ニコラース・フィッセルから発行された《マリー・ルイーズ・ドルレアン の肖像》は同一人物を描いた田善の版画の図様の源泉となったことを指摘する。

次にこれらの事例と先行研究の成果をもとに、田善の原図受容の手法と特色について考察する。田善の作品と原図を比較すると、モチーフの大きさがほぼ一致するものがあることから、田善はまず手始めに原図に薄紙などを敷き、上からなぞって写し取っていた可能性がある。ただし、田善はそうした単純な「引用」にとどまらず、モチーフ同士の「合体」、あるいは「改変」により、独自の表現を追求したものもある。そうした場合においても、基本的に原図の構図などは崩すことなく、モチーフの一部を修正するに留まっている点が特色として挙げられる。